「マオの探し物」

文・絵　小龍

表紙絵　Mick

目次

1　起　4
2　承　18
3　転　30
4　結　46

1　起

宣統三年の、あの辛亥革命が起こった年に私は生まれた。
この年を境に、とてつもなく長い間、この大陸の頂点に立っていた、たった一人の皇帝という存在が突然居なくなったわけである。
三億の民草がどうしたかって？
そりゃもう、てんやわんやの騒ぎだったろう（見ちゃいないが）。
しかし、今から語るこの奇妙な物語には、あの激動の時代や世界情勢なんかはこれっぽっちも関わってくることはない。
なぜなら、「彼女たち」はそういった世事からは一番遠いところに居るような輩だったからだ。
中でも一番奇妙な存在である少女は自らをマオと名乗った。
中国語で「猫」のことだ。
それが偽名かあだ名のたぐいであることはすぐに分かったが、かなりあとに

なって聞いた本名はとても覚えきれないほど長かったので、いまだに私はマオと呼んでいる。

一見した風貌は「マオ（猫）」というより、キツネとタヌキを足して二で割った後に引き伸ばして丸めたような、なんともいえないファニーフェイスで、お世辞にも美少女とは言えなかった。

これは、そんな奇天烈な少女の話である。

私は日本人だが上海で生まれ育ったせいで、普段は中国語を使って生活している。見かけはほとんど中国人と変わらない。

たまにカタコトの博多弁が出たりするのは、五歳のころまで生きていた父親がバリバリの博多出身だったからである。

この父親は日露戦争前後の日本で生糸の生産に成功して一代で成り上がり、巨万の富を得て調子に乗った挙句に「世界進出をするぞー！」と意気込んで女房を連れ、博多から上海に渡ってきた冒険野郎で、しかし、いざ上海に渡ってみれば

この魔都の魅力にすっかり取り憑かれ、会社を興すことなど綺麗さっぱり忘れて遊び暮らし、最期は雪の積もったアパートの玄関前で幸せそうな顔をしておっ死んでいたそうだ。

死因は急性アルコール中毒である。

普段から父親の放蕩ぶりに精気を抜き取られていた母親はむしろこの事態を喜んだのではないだろうか。葬儀や在外公館との連絡を淡々とこなし、小さかった私を連れて日本に帰ろうとしたが、日本語もろくに喋れない私はいまさら見知らぬ国には行きたくないと駄々をこね、普段から懐いていたアパートの隣人に助けを求めた。

隣の住人はイギリス人の夫婦で、大変な親日家でもあり、私はたいそう可愛がられていたのだ。ミスターは新聞記者で、当時の上海にはたくさん居た、いわゆる特派員と呼ばれる一人だった。小さい息子が居るらしいのだが、ロンドンの全寮制の学校に通っているという。そのイギリス人夫婦にとって私は「本国に置いてきた息子のかわり」だったのかもしれない。

「『外国』には行きたくない」と泣き叫ぶ私に困惑した母親は、このイギリス

人夫婦にいったん私を預けることにした。
おそらく大人同士の話し合いがあり、金銭のやりとりがあり、すったもんだの末、私はそのまま上海で思春期を過ごすこととなった。
日本に帰ってからはすっかり元気になったらしい母親が、ことあるごとに手紙を寄越し、
「そろそろ故郷がどんなところか見たくなったのではないですか？　いつでも帰ってきなさいね」
と、いってきたが、その再三の誘いを無視し続け、結局、私は上海で成人し、親父の夢を実現させるという名目で小さいながらに会社を興し、いくつかの店を経営することになった。
いちばん最初に軌道に乗ったのは、カタコトの博多弁が喋れるということもあって始めた、日本人相手の娼館だ。
金払いがよくて行儀のいい日本の小金持ちたちは、私の国籍とカタコトの博多弁を聞くと、無条件で安心するようだった。
ただ、この事実を知ったら、親代わりのイギリス人夫婦はきっといい顔をしな

かっただろうが、その頃には彼らもイギリスに帰国しており、成人した息子と仲良く暮らしているはずだった。

他にも、健全な茶房や輸入品を扱う店なんかもちょこちょこ作っては一進一退を繰り返し、なんとかいままでやってきた。

お嬢様育ちの母親が、日本に帰ってから寄越したじいやもすぐに中国語を覚えて、今では有能な手足になってくれている。私も基本的には貧乏を知らないボンボンなので、人生の裏も表も知りつくしたようなこの老人の存在はありがたかったそ。

そうして、二十世紀もだいぶ過ぎた頃、相変わらずこの国の情勢は不安定だったが、先にも言ったように、ある日、唐突に硬い屋根瓦をぶち破って降ってきたものはそんな浮世のことなどなにひとつ関係ないという顔で、こう言った。

「実はワタクシ、天界に住む天女でして、大事な羽衣をうっかり下界に落としてしまい――」

「うそつけ――」

率直な感想が思わず声に出た。

屋根をぶち抜き、床をぶち抜いてなお生きているのも非常識なのだが、そのボロボロの煤けたナリで「天女」とは恐れ入る。

なるほど、いかにも姑娘（クーニャン）な髪型をしているし、どこかの山奥の簡素な民族衣装のようなものも着ているが、こんな三頭身の不遜な目つきの天女などいてたまるか。

「私の知る限り、天女というのは見事な柳腰を持った八頭身の美女であって、キミのような寸胴鍋のお子様ではないぞ、断じて」

「そうは仰いますがね、うさぎさん」

だれがうさぎだ。

「わたしが子供に見えるのは、環境がそうさせているだけでして」

「ハァ？」

「天仙界の住人というのは、基本的に年をとらぬものなんですよ。なぜかっちゅーと、これ、本当は言っちゃいけないんですけど、やつら、毎晩酷使しすぎのせいか、生殖機能がちょっとおかしくなってましてね。人間ほどバンバン子供作れないわけです。だから、百年程度のスパンで死んじゃうと、あっという間に

みんないなくなっちゃうんで、一人一人が千年も万年も生きるようになってるわけですね」

なんだって？

「それは本当なのか!?」

などと、真剣に聞いてしまった。

私も普通に中国で生まれ育ったわけだから、道士の知り合いも居るし、毎年年末には、竈（かまど）をピカピカに掃除することも忘れていない（※中国では竈の神が各家庭の内情を天帝に報告する役目を負っているので、竈の掃除は念入りにする風習がある）。

清朝が滅んで三十年、車の走る時代になっても、一般家庭はそんなものである。

つまり、この大陸には、いまだに天仙に対する畏れというものが厳然と存在するのだ。

だのに、このクソガキときたら、

「もちろん冗談です」

悪びれもせずに、さらに言うなら不遜な目つきを一ミリも動かすことなく、言う。

「ちょっとしたパーティージョークっつうか？　初対面の人を和ませるための心憎い演出ですな」

「……」

あきれてものも言えない。

その私の様子を、このマイペース姑娘は勝手に勘違いする。

「あれ？　わたしの広東語通じてないです？　先生（シェンション）（※ミスターの意）はどこ出身の人？」

この一連のやり取りをしたのは、上海ではない。

当時、私はとある地方に屋敷を建てて住んでいた。上海の会社はいちおう放っておいても大丈夫そうだったので、内陸にも事業を拡げようとしていたのだ。場所は、かなり奥地の、交通の不便な地方都市、とだけ言っておこう。ここら一帯では、広東語のほかには北京語もよく聞くし、道端ではたまにモンゴル語なども飛び交っている。

「いや、言葉は通じてる。この非常事態に色々と飽和しているだけだ」
「む？　非常事態、とな？　ああ、まぁ、そうですよねー。いきなり空からこんな可憐な少女が落ちてきたわけだしー」
はて。
可憐？
私の目の前に居るのは、ただのちんちくりんの寸胴鍋にしか見えないが。
「いや、それについては、わたしもね、いったい全体自分の身にナニが起こったのか、分かるようで分からないっていうか？　まぁ、話すと長くなるんですけど、ここはひとつ、熱いお茶の一杯もいただいて、ですな」
「……」
だめだ、これは、と思った。
たまに、商売相手の芸術家にこういう変り種が居る。人の話をまったく聞いてないので、なにを言っても、なにひとつ応えない、という最悪のタイプだ。
「若、六級でよろしいので？」
さっきから、ぶち抜かれた床を苦い顔で眺めていたじいが助け舟を出してくれ

た。
六級というのは、まぎれもなく粗茶レベルの茶葉のことだ。
客には特級か一級を出すのが常だが、こんな客ともいえないような珍客には、確かに六級で充分である。

その後、改めて事情聴取をして、いくつかの事実が判明したわけだが、この少女は自らを「マオ」と名乗り、とある仙人の弟子だと言った。
はぁ？　仙人ってホントに居るのか!?　――という間抜けな質問をするには、私は年を取り過ぎていたのかもしれない。といっても、まだ三十代半ばで、独身で、人生はこれからである。いや、少なくとも私はそう思っている。
「九仙山ってご存知ですか？　まあ、ここからだと、ちょっと西の方にある山なんですけど」
足元には雲が漂うその山頂の洞府で、師匠の部屋を掃除していたところ、誤ってお宝の玉（ぎょく）を箒（ほうき）でかっ飛ばしてしまったらしい。

それを知った師匠は激怒し、寸胴鍋のようなマオの体を引っつかむと、そのまま砲丸投げの弾よろしく下界に投げ込んだそうだ。恐るべき腕力である。仙人って、もっとこうカスカスで非力なイメージがあったが、中には筋肉ムキムキなのも居るのかもしれない。

「『七色の龍玉（りゅうぎょく）』といって、文字通り七色に光ってるんですが、なんでも世界に二つとない至宝らしいです」

「至宝？　というからには、それなりにご利益があるものなのか？」

売れば十億はくだらないとか？

それとも、永久に商売繁盛が約束されるとか？　――そんなことを想像してしまった。我ながら浅ましい。

「まぁ、一応、あるんじゃないですかねー？　普段ポヤ～っとした師匠が、人相変わるほどの叫び声あげてましたから」

「……ふむ」

なんだろう。

よほどすごいお宝なのだろうか。

ちょっと見てみたいものである。
あわよくば触ってご利益を得てみたくも……、いやいや、そんな元本なしで儲けようなどという考え方は商売人として非常によろしくない。よろしくないぞ。
「ただ――」
マオがじっと私の邪（よこしま）な心を見透かすように言った。
「俗世を捨てた仙人が持ってるものなので、換金性が高いとか、持ってるだけで大判小判がざくざくとか、そういう低俗な話ではないと思いますネ」
〝低俗〟のところがやけに強調されていた気がするが、なんだ、こいつ。腐っても仙界の人間といったところか。なぜ私の考えてることが分かったんだろう。
「まぁ、とにかくそんなこんなで、その『七色の龍玉』を見つけるまで帰ってくんなって言われちゃいましてねー。いやはや、参りましたわ。無一文なのに」
ズズッと六級のお茶を飲みながら、「あ、お茶請けないすか？」などと言ってくるさまはもう大阪のおばちゃんレベルではないだろうか。いや、大阪に行ったことはないが、あくまでも博多出身の父親が語っていたイメージである。念のため。

「なるほど……。まぁ、その話が本当なら、多少の同情もするが、私は商売人なのでね。感情ではなく、損得のほうの勘定で動く人間だ」
「ホウ。と、おっしゃいますと？」
小さな瞳孔を銃口のようにして、するどく視線を飛ばしてくる。
この妙な迫力にひるんではいけない。
「とりあえず、キミがぶち抜いた屋根と、床を修理してもらおうか」
最初に舐められたら負けなので、少々ふんぞり返って強気に言い放った。
相手が小さい子供だからといって、情けをかけてはいけないのだ。これは商売人の鉄則である。
「なんですと!?」
「床は明日でもいいが、屋根は大至急頼む。雨が降ったら困るからな」
「なんと人使いの荒い。児童虐待で訴えんぞ」
いや、さっき、子供に見えるだけで、実は子供じゃないみたいなことを言ってなかったか？
有無をいわさず大工道具一式を渡して、あとはじいに任せることにした。今日

中にさばかなければいけない仕事がまだ残っているのだ。
ただ、このとき、商売人としてのプライドだの損得勘定だのはさっくり忘れて、屋根と床の修理代くらいは目をつぶり、こんな胡散くさい子供はとっととたたき出しておくべきだったのだ、と、早速翌日から後悔することになった――。

2　承

マオは驚くほどなにもできない子だった。

料理をさせれば炭のようなものを作るし、風呂掃除をさせれば家中水浸しにする。よくもこんなていたらくで仙人の弟子が務まったものだと思う。いや、務まっていなかったから、師匠が大事にしていた『七色の龍玉』を箒（ほうき）でかっ飛ばしてしまった、というわけか。

もうこれだけ無能だと、かえって被害のほうが大きくなるので、家の中のことをやらせるのは諦め、当面は適当に庭掃除でもやっていてくれればいい、と言っておいた。

というのも本人が、『七色の龍玉』が落ちていったと思われる方向に自分は投げ落とされたので、墜落した近辺に目的の玉（ぎょく）もあるはずだと主張し、屋敷の庭を捜索させて欲しいと言ったからだ。

それなりに広い敷地なので、野球のボールほどのものを探しだすのは大変だろ

うが、好きにさせることにした。
私は日々の金策でそれどころではなかったので、マオの探し物を手伝うことはなかった。
地球上をさんざん痛めつけたあの世界大戦が終結して、まだそれほど経っていない頃のことである。これからの景気がどうなっていくのか、誰も予想がつかない状態で、商売人としては先見の明をもって動かなければならないのだ。
決して少なくない従業員を抱える身としては当然プレッシャーもあるし、父親の借金は返していかなければならないし、博多でお嬢様暮らしを続けている母親に仕送りもしなくてはならない。心が休まるときはなかった。
マオとは、よく言えば、煩わしさのない、悪く言えば、ドライな関係が始まった。
私としては厄介な親戚の女の子を預かってしまったくらいの感覚だったし、マオはマオで、性質（たち）の悪い人買いの家に落ちなかっただけマシ、という感想を持っていたんじゃないだろうか。
だから、お互い、必要以上に近づくことはなかった。

ただ、私とじいと、数人の使用人だけで地味に暮らしていた屋敷が、マオが来たことで変わったのは確かだ。
決して華やかになったとか、明るくなったとか、そういう単純でハートフルな意味ではない。
騒がしいというほど騒がしくなったわけでもないのだが、空気が絶えず動いているというか、どこかせわしないというか、なんともいえないガサガサした感じになったのである。
それまでは、閑静だけが取り柄のような屋敷だったのに、子供が一人居るとこうも雑然とするのだろうか。
「すいませーん、梯子（はしご）貸してくださーい」
ある風の強い日には、そう言って、屋根の上にのぼり、例の『七色の龍玉』を探していた。
そんなところにあるわけもないと思うのだが、お隣のご主人のカツラが、うちの物干し竿にぶら下がっていた例もあるので、百パーセントないとも言えない。
私は高所恐怖症気味なので、見ているだけでハラハラしていたのだが、マオは

文字通り猫のようにヒョイヒョイと身軽に屋根の上を歩いていた。
しかし、まともに玉探しをしているのを見たのはそれくらいで、あとはブラブラしているだけだった。
雪が降れば雪だるまを作って遊んでいるし、天気がいい日は、のんびり日光浴などしている。あるときなどは、暇に任せて、そこらへんのカエルと会話までしていた。仙人たちの住まう世界には、こういう変わり者ばかりが居るのだろうか。
マオが、義務ではなく、お義理で探している『七色の龍玉』のことについては、実は私も多少の興味を持っていた。
仙人のお宝なのだから、ただの宝石とは思えない。それを所有する者になんらかの利益をもたらすのだろう。

〝利益〟

いい言葉だ。

本音を言ってしまえば、その『七色の龍玉』が見てみたくて、マオが居候することを許可したようなものである。
人智を超えた『至宝』は、いったい、どんな素晴らしい『利益』をもたらすのか。商売人でなくとも、好奇心がそそられる話だ。
しかし、肝心のマオはというと、とりあえず、周囲からうるさく言われない程度には探してますといった体で、義務感や使命感といったものはまったくないようだった。
玉が見つからなければ師匠は困るのだろうが、マオ自身は見つかっても見つからなくてもどうでもいいように見えた。
「そもそも、あんな高いところから落ちて、玉が無事かどうかも怪しいですしねぇ～」
ある日のおやつ時にそう言っていた。
「割れて粉々になってるかもしれない、ってことか？　もし、そうだったら、どうするんだ？」
「まぁ、そのときはそのときですね」

「いいのか、そんないい加減で……。だいたい、君は少し危機感が足りないんじゃないのか？　君を下界に投げ込んだ師匠だって、まだ怒ってるんだろう？」

何度か、嗜（たしな）めたことがある。

この三頭身ときたら、毎日おやつを食べているか、昼寝しているか、遊んでいるか、のどれかなのだ。

しかし、

「辰巳（たつみ）さん、そんなに人生あくせく過ごしてても、いいことはひとつもないですよ？」

逆に説教めいたことを言われる。

悪いが、私は君の三倍くらいは長く人生を生きているつもりなんだが。なぜ私が、こんな十歳くらいの寸胴鍋体型の女の子に説教されねばならん。

「あ、そうだ、辰巳さん」

マオは私をそう呼ぶ。

「先生（シェンション）」（※ミスターの意）は堅苦しいし、「老爺（ラオエ）」（※旦那様）というほどの上下関係はないから、名前で呼ぶしかないわけだが、これが妙に落ち着か

ないのである。
母が言っていたが、日本では男女間では、ステディの関係でもない限り、ファーストネームは呼ばないらしい。別にそういう意味で落ち着かないわけでもないのだが、もっと他の、ぴったりした呼び方があるような気がしてならないのだか。
といって「叔叔（シュシュ）」（※おじさん）と呼ばれるのは抵抗があるし、私はマオの「師父（スーフゥ）」でもない。とすれば、やはり私とマオのような、まったくの他人という関係では互いに名前で呼ぶしかないのだ。
「ちょっと、爺爺（イェイェ）に頼まれたので、お使い行ってきます」
「ああ、いってらっしゃい」
じいは、たまに、こまごました日常品の買い物や、小額の集金などをマオに頼んでいる。
そのほうがマオの息抜きにもなるだろうという配慮なのだが、こんな小さな子供、しかも女の子を一人で外に出すなんてどうかしてる、と隣のカツラ野郎……、もとい、ご隠居には言われた。

こんな片田舎になると、昔の風習がまだ色濃く残っていて、良家の子女は屋敷の奥から出さないのがよいとされるのだが、私はあまりそういう教育方法は好きではない。マオはああ見えて仙人の弟子なのだから、人買いだのかっぱらいだのをだまくらかす術の一つも身につけているはずである。その点は、大丈夫だろう。隣のご隠居には言わせておくさ。

マオが出かけたので、急に屋敷が静かになった。

春節も間近なので、今は使用人たちも全員帰省している。

じいも私も日本人なので、あまり中国の春節を大々的に祝うことはないのだが、一応、春聯（しゅんれん）（※春節のときに玄関に貼る赤い紙のこと）くらいは貼っておくか、と納屋に脚立を取りに行った。

中庭を横切ったとき、なにか、目の端で光ったような気がした。

「……？」

人工池の向こうだ。この曇り空で、太陽は見えていないのに、なにが反射したのだろう。

近寄ってみるも、石畳が終わって乾いた土が見えた場所にはポツポツと庭木が

植えてあるだけだった。
しばらく周囲に視線をめぐらせてみたが、なにも変わったところはない。
ふと、足元を見ると、
「……!?」
大きなカエルが居た。
こちらを見上げている。
池で跳ねている小さな緑色のそれではなく、茶褐色のもったりした感じのカエルだ。大人の手の平ほどの大きさはある。
「危ないな。踏むところだったじゃないか。もっと端っこを歩いてくれ」
そう言ってから、笑いたくなった。
この前、マオが池のカエルに話しかけているのを見たせいだ。
普段の私は動物に話しかけるほど、ファンシーではない。
≪おや、案外やさしいんだね、旦那≫そんな声が聞こえた気がして、ギョッとした。
振り向いて辺りを見渡すも、誰も居ない。

今にも雪が降ってきそうな雲が上空に立ち込めているだけだ。
≪どこ見てんだい。こっちだよ、こっち≫
どうも、下から聞こえる。
まさか、このカエルか……？
見ると、足元のそれが、ニヤッと笑った気がした。
黒いつぶらな瞳が可愛いといえなくもないが、たとえば十代の美しい王子様が悪い魔法使いによってこの姿にされたとは、到底思えなかった。
無精ひげを生やした四十くらいの酔客が悪戯好きの仙人にカエルにされてしまった、といったほうが百倍は納得できる。
「……」
カエルをじっと見つめる。
≪お？　その目は疑ってんのかい？　まぁ、無理はねぇやな。人間は常識っつー狭い世界に住んでるからなぁ≫
狭い、だって？
一周四万キロの地球は、狭いのか？

まぁ、ニューヨークからパリまで、三十三時間で渡ってしまったリンドバーグにしてみれば狭いんだろうな。

≪ハハッ。まぁ、足元のカエルも、龍玉も見えないようなら、ニューヨークだろうが、パリだろうが、観光したところで、なにも見えはしねぇさ≫カエルはそう言うと、ピョン、と飛んでいってしまった。

いや、本当にあのカエルが喋ったのかどうかは分からないが、私は妄想の世界でカエルのセリフを考えられるほどにクリエイティブな人間ではない。

「……」

もう一度、潅木の下を見た。

なにか、不透明なガラスの欠片のようなものが埋まっている。

（まさか……）

そう思ったが、気づいたときには夢中で周囲の土を掻き出していた。

出てきたのは、直径は十センチはないだろう。まさしく野球のボールほどのガラス玉だった。

それが、七色の龍玉だったのだ。

3　転

「また今月も赤字か……」

三回も検算してみたが、計算間違いということはなかった。己の優秀な算盤さばきがにくい。

「はぁ……」

思わずため息が漏れる。

これで、三ヶ月連続で赤字になってしまった。

そろそろ潮時かもしれない。

土台、こんな片田舎では客足自体が望めないのだ。西洋の輸入雑貨を所望する物好きな金持ちが一人居ても、百人の庶民が日常品を買ってくれなければ商売にはならない。

しかし、その百人はみな、痩せた土地を耕しながら、細々と自給自足で命をつないでいるに過ぎないのだ。彼らが金を落としてくれるはずはない。

「……」

こうしていても黒字になるわけではないのだが、しばらく蝋人形のように固まったまま、書類を睨んでいた。

窓の外は相変わらず分厚い雪雲に覆われていて、空が暗い。

ふと、本棚の一番上に置いてある木箱が目に入った。この前、庭で見つけた玉（ぎょく）が入っている箱だ。

それは、

『七色の龍玉』

と呼ばれるにふさわしい、不思議な光を放つものだった。

光源がどこにもないのに、自ら輝いているその玉は、やはり人間界のものではないのだろう。私はあんな不思議なものを、生まれてから三十五年間、見たことがなかった。

あの玉を発見したあと、思うところあって誰にも告げず、木箱にしまって、書斎の本棚の上にわざと無造作に置いておいた。

ネコババしたいとか、至宝のご利益を独り占めにしたいとか、そういう邪（よこしま）な

意図がなかったとは言い切れないが、たぶん、そういった理由ではない。
自分でもうまく説明できないのだが、いま、これをマオに渡してしまってはいけない気がしたのだ。
つまり、なにひとつ苦労せずに、誰かに見つけてもらった玉をそのまま持ち帰るのではマオのためにならない、と？
いや、そういった胡散臭い教育論でもないはずだ。
では、なんなのだろう、と、自分でも考えるのが面倒になって、半ば放置する形で、あそこの本棚の上に置いてあるのだ。
じいもマオも、この書斎にはわりと気軽に出入りしているが、おそらく二人とも気づいていない。
いまも、カステラ片手にやってきたマオは、「赤字くらいでクヨクヨすんなよ！」
と、慰めてくれている。
まったく、どっちが年上か分かりゃしない。
蝋人形のように堅くなっていた体をのそのそと動かして、マオが持ってきてく

れたお茶を飲んだ。
「あ、そうだ。辰巳さん」
マオはよくこういう物言いをする。
どう見ても「ふと思い出して」という顔ではないのだが、あくまでも「ふと思い出して」という様子で言うので、それに気づかない振りをしなければならない。大人は大変だ。
「ん……？　なんだ？」
「おたくの無駄に広い庭に、でかいカエルが居るでしょ？　池に居るちっさい緑のじゃなくて。薄汚れた茶色みたいな色の」
「勝手に庭に住みついている両生類まで把握してないが？」
咄嗟に嘘をついた。
この前、茶褐色のカエルに話しかけられたことは考えないようにしている。
私の生きてきた常識の中では動物は喋らないからだ。
「そのカエルがですね、ここ数日、見ないんですよ。くたばったのかな」
「……」

まったく。人の話を聞いていないな。いま、知らないと言っただろうが。なのに、なぜ会話を続ける。
こういう場合は、大人の私が折れるしかないのか。
「この寒さだし。冬眠してるんじゃないのか？」
投げやりにそう言った。
「うーん……。冬眠が必要とも思えないんだけど」
「……？」
あれ？　カエルも種類によっては冬眠しないのも居たっけ？
案外、マオくらいの子供のほうが生物博士だったりするので、ここは有耶無耶にしておこう。
「カエルが気になるのか？」
「まぁ、ちょっと」
なんだか、マオのほうが有耶無耶だ。
おかしいな。なんだろう。
それからしばらくして、珍客があった。

ちょうど、マオがお使いに行っている間のことで、私が玄関まで出ていったのだが、昨夜、H・G・ウエルズなんぞを読んで寝たもんだから、すっぽりとかぶりものに覆われた物体を見たときは宇宙人かと思った。

しかし、浮浪者がかぶってるようなボロ切れではない。なにやら上等なビロードのようなものだ。それで全身を覆っているので、男か女かも分からない。

かろうじて、口元だけは見える。その周囲の白い肌と細い首からすると、女性だろう。

「突然失礼しますー。弟子がお世話になってますぅ」

その第一声で、宇宙人疑惑は晴れたし、彼女が何者なのかもすぐ分かった。

マオの師匠だ！

こんな若い女性だったのか、とまず驚いた。

ビロードから覗く白い手は皺一つないし、この若々しい声からしても、二十代に違いない。

「弟子って、マオのことですか？」

言わずもがなのことを聞いみてたら、意外な答えが返ってきた。

「マオ？　……あ、そう名乗ってるのね」
「は？」
「いえ、こちらのことです」
なるほど、やはりあれは偽名というわけか。
本名を名乗れない理由なんて、たいていロクなものではない。
おおかた、仙界ではその無能ぶりが有名になって、ブラックリスト入りしたとか、そういう話だろう。
「それで、ご用件は……」
当然、あの無能の三頭身を引き取りに来たのかと思いきや、この師匠からはとんでもない話を聞く羽目になった。

応接間でお茶を振舞ったが、それでも師匠は頭からすっぽりかぶったマントを脱ごうとしない。
俗世を捨てた高位の仙人は、一般人に顔をさらしてはいけないのだろうかなど

と思ったが、もしかしたら、単に風邪でもひいているのかしれない、と思った。
声が少々ハスキーなのである。
今日はやけに冷え込んでいるし、この広い屋敷は暖房がなかなか行き渡らず、申し訳なく思う。
私は、マオがうちに居候することになった経緯を手短に説明し、マオから聞いた事情もそっくりそのまま師匠に説明した。
師匠は頷きながら聞いていたが、私の話がひと段落つくと、「実は、あの子が落とした玉はレプリカなんですよね」
驚くべきことを言った。
レプリカ（複製品）だって？
そんな馬鹿な、と口から出かかった言葉をなんとか飲み込む。
では、うちの庭で見つけたあの光る玉は？
あれはレプリカなのか？
いや、まさか――。
私は商売人の端くれとして、あの輝きは偽物ではないと信じているのだが、つ

まり、その私の目が節穴だったってことか？
「あれは、龍王様から直々に預かっている、大切な玉なのです。本物は厳重に管理してます」
「なんと……」
今度は龍王だって？
そりゃ『龍玉』というくらいだから、龍神だの龍王だのが出てきてもおかしくはないが、そんな気軽に言われても、会ったことのない私は「ハァ、そうですか」としか言いようがない。
まさか、龍って、タツノオトシゴのことじゃないよな？
「しかし……、だったら、下界に放り込んで探させる必要はなかったのでは？」
「ええ、そうなんですけど。ちょっと思うところもありまして……」
師匠の白い手が優雅に動いて、頬を軽く押さえた。
「思うところ？」
「ええ。あの子ったら、ああ見えて箱入りなものだから、世間知らずもいいところなんです」

それはよく分かる。
弟子のくせに、ぜんぜん苦労をしていないみたいだからな。
「それで、少しは社会勉強をさせようと思いまして」
「はぁ……。社会勉強、ですか？」
確か、仙人というのは社会と距離を置く人間ではなかったか。それが社会勉強とは、本末転倒な気もしないではない。
マオに家事能力を身につけさせるのは賛成だが、それなら、この師匠が自分の洞府で仕込めばいいだけの話だ。
「ご迷惑かと思いますが、もうしばらくあの子の面倒を見てもらえます？」
私の思惑などおかまいなしに、師匠はさくさくと勝手に話を進めて、なにやら頑丈そうなアタッシュケースをヒョイ、と机の上に置いた。
「生活費は、これで足りますかしら？」
おもむろに開けて見せる。驚くことに、中身は札束（しかも香港ドルだ！）だった。
百ドル札が百枚の束になったものが、ひいふう……、二十四束もある!?　二十

四万香港ドルだって!?（※二〇一五年の感覚では数千万円の価値）
札束を瞬時に勘定できてしまうのは、商売人のさもしい習性であるが、長年商売をやっている私ですらこんな大金を見たことはなかった。
偽物じゃないだろうか、と一瞬思ったが、この仙女が私を騙す理由が見当たらない。厄介者の弟子を押し付けたいだけなら、洞府に閉じこもって知らんふりをしていればいい。わざわざ訪ねてくる必要はないのだ。
「足りますかって、一生遊んで暮らせますよ」
呆れて言った。
しかし、貨幣価値を知らないわけでもないのだろう。
こんなピン札、しかも香港ドルとくれば、どこか大手の銀行に口座を持っているに違いないからだ。
「あら、そうですか？　じゃあ、問題ないですね」
快活に立ち上がる。そして、背を向けた。
「そういうことなので。あとはよろしくねぇーん」
「待たんかい、こら」

軽い調子で去っていこうとするので、思わずマントをハシッと掴んだ。
なにが「そういうこと」なのか、ちっとも分からないし、どさくさに紛れてアタッシュケースの横に置いていったその箱はなんだ。
こんな怪しい大金と、怪しいブツを残してバックれる気なら、せめて住所と電話番号と、顧問弁護士の名前くらい置いていけ！
しかし、文句を言おうとした私の口は、次の瞬間、開いたまま固まってしまったのだった。
スルリ、とはがれたマントの下からは、絵に描いたような美女が現れた。
美女は短く、
「きゃ」
と声を上げたが、それほど慌てた様子もない。
むしろ、私のほうが慌てまくったのだ。
「あっ、いや、その、ごめんなさい――」
断っておくが、私は女性に免疫がないわけではない。
初恋は七歳のときにとっくに済ませたし、自慢するみたいでかっこ悪いのだ

が、上海の社交界ではモテていたほうである。
どこそこ銀行の副頭取の娘だとか、株で一儲けしたマダムとか、夜の店で働く踊り子とか。
もっとも、彼女たちが愛していたのは、私の容姿でも性格でもなく、私の会社が生みだす利益であることも分かっているが、そんなことでも何も無いよりはマシなのだ。
人間は寂しい生き物なのである。
夜中に一人、金庫の前で紙幣を撫でているよりは、ベッドで恋人を撫でているほうがいいに決まっている。
ただ、紙幣は手放さない限りそばに居てくれるが、恋人は気まぐれでどこかへ行ってしまうことが多いので、世の男どもは金だけを愛している振りをするのだ。
「あ、マント、返します。すみません、ホントに――」
いまどき、こんな古風な漢服を着ているのも珍しいが、服の上からでも分かる見事な柳腰と、あらわになった白い首筋と、それから、潤んで黒々とした双眸、

うっすらと紅く染まった頬、綺麗なカーブを描いた細い眉――、そのすべてに釘付けになってしまった。
「いえ、ちょっと暑かったくらいですから、結構ですわ」
野郎の手の触れたものはもう要らないってか？
などと卑屈な考えも芽生えたが、それなら幸いと、無意識にマントを抱え込んでいた。フワリ、といい匂いがする。
「あ、あの、ちょっと待って、せめて、お名前を――」
美女がくすっと笑った気がした。
「セイコって呼んで」
そう言うと、風のように消えてしまった。

セイコさん、か。
どういう字を書くんだろう。
また会えるだろうか、としばらくはボーっと彼女のことばかり考えていた。

弟子がうちに居る限り会う機会はいくらでもあるだろう、と姑息に計算し、少しはマオの待遇もよくしておくか、とこれまた姑息に、出先で売っていた〝たい焼き〟をマオのために買って帰ったりもした。

マオは、というと、やはりあのカエルのことを気にしていたが、師匠が来たことに気づくこともなく、日々を過ごしていた。

そうして、春節が終わり、本格的に春の足音も聞こえてくる頃になって、私はまた中庭でカエルを見つけた。

あの茶褐色の、大きなカエルだ。

「そろそろ時間切れだ。主（あるじ）も呼んでるんで、俺は引き上げるよ、旦那」

今日は、カエルのほうから話しかけてきた。

やはり、これは普通のカエルではないらしい。それは認めなければなるまい。

「時間切れ？　どういうことだ？」

カエルはフフン、と笑って教えてくれた。

「竜生九子（りゅうせいきゅうし）って、知ってるかい？　西の龍王に仕える九匹の霊獣のことさ。俺は椒図（しょうず）。九兄弟の末弟でね、これは仮の姿ってやつさ」

霊獣――？
なんだか、頭がついていかない。
それで、その霊獣たちの主（あるじ）ってのが――、
「龍王、だって？」
「そう。西海龍王、敖閏（ごうじゅん）様のことさ」

4　結

龍王なんて名前は偉そうだが、『西遊記』では孫悟空にサクっと倒される役回りの、いささか情けない存在だったりする。だから、この椒図（しょうず）と名乗ったカエルからその名を聞いたときも、私はたいした感想は持てなかった。

「それで、その龍王様はいったいなんの用事でお前さんをこんな辺鄙な田舎に寄越したんだ？」

「そりゃー……」

と、椒図が言葉を詰まらせた。

明らかに、理由をいま考えている、といった感じだ。

「……」

「……」

カエルの背中から脂汗がたらたらと流れ出している。小鉢の上にでも座らせて、『ガマの油』として売ったろか。

「まぁ、アレだ。自分が預けた龍玉のことが心配だったからでしょうよ」
呆れるほどの時間を置いて、ようやくそう言った。
「……？」
よく分からない話だ。
だったら、なんでそんな大事な龍玉をセイコさんに預けたんだ？
それに、疑問はもうひとつある。
「そんなに大事な龍玉を、このままにして帰っていいのか？」
本物と思われる『七色の龍玉』は、私の部屋の本棚の上にある。
ただ、セイコさんが持ってきて、問答無用で私に預けたものも、それと寸分変わらぬ玉（ぎょく）だった。
つまり、私の部屋には、いま、『七色の龍玉』が二つあるのだ。
「ああ、それはね、旦那が信頼できる人間だって分かったから、もういいってことなんでしょうよ」
「……」
私は試されていたのか？

それで、合格したとでも？
あの光る玉をネコババしたつもりはないが、持ち主に返そうともしなかったのに？
「そいじゃ、旦那、お元気で」
椒図はなんの説明もせずに、ピョンと跳ねて、去っていってしまった。

師匠が来訪し、椒図が去って数日後、私はマオとじっくり話をしてみることにした。
彼女はすっかり居候を決め込んで、帰る気はなさそうに見える。
しかし、私はというと、今後も赤字が続くようなら思い切ってここでの事業を畳み、上海に戻る予定なので、マオにもそのつもりで身の振りを決めてもらわなければならないと思ったのだ。
「君がうちの屋根をぶち破ってからだいぶ経つが、帰らなくていいのか？」
ストレートに聞いてみた。

八頭身の美女相手には緊張しても、三頭身の子供相手ならこんなものである。
「うーん……。どうせ向こうじゃ、ただの穀潰しですからねー……」
マオの反応は鈍い。あまり、帰りたくはないのだということは分かる。
「でも、立派な仙人になるために修行をしてきたんじゃないのか？」
そう言ったら、さんざんな答えが返ってくる。
「仙人なんて、あーた、殺劫（さっこう）を解消するために、派手な必殺技で人をコロしまくってるような、イカれぽんちばかりですぜ」
どうやら、仙人に憧れて仙人になりたくて洞府の門を叩いたわけではなさそうだ。浅いか深いかは分からないが、事情があるのだろう。
だいたい、最初からこの師弟は怪しかったのだ。そこに、『七色の龍玉』なんてものが絡んできたのだから、怪しさは倍増である。
「ちょっと待っててくれ」
私は部屋に行って、例の箱を二つ持ってきた。ちょうど大きさは同じくらいだ。
一つは、自前の木箱で、私が庭で見つけた玉が入っている。もう一つは、セイ

コさんが持ってきた黒檀製の上等な箱で、同じく、〝本物〟と見分けのつかない玉が入っている。彼女はこれについて、特に説明しなかった。ただ「預かっててください」と言っただけだ。

しかし、ニュアンスからすれば「マオが落としたのがレプリカで、こっちは本物」と言っていることになる。

二つの箱の前で、一度、咳払いをする。

「実は、この前、この箱を……」

「師匠が来たんですか？」

「……!?」

鋭い。鋭すぎる。

まだ何も説明していないのになぜ分かったんだろう。

「その黒い箱、見覚えがあります」

ああ、なるほど。そういうことか。

「なら、この箱に何が入っているかも知ってるのか？」

「まぁ、見当はつきますけど」

マオは自分が落としたものが〝本物〟だと思っているはずだ。
ということは、この黒檀製の箱の中身は『七色の龍玉』のレプリカだと思っているってことだよな？
「ふーん。そうですか……、師匠、来たんですね……」
「いや、それで、だ。うん、セイコさん、美人だね」
聞かれてもいないことを口走ってしまった。
別に後ろめたいことなど何もないのに！
「……」
マオは変な顔をしている。
そして、
「すぐバラすのもナンですが」
冷めた表情で言った。
「な、なんだ？」
「あれ、男っすよ」
「……ハイ？」

「名前は広成子（こうせいし）。ああ見えて、十二仙の古株で、実力はあるらしいんですけど、まぁ、私にはただの女装好きの変態にしか見えませんね」
「……」
頭の中で、グワワワワ～ン、という鐘の音が盛大に鳴った。
ハイ？
いま、一週間の恋が唐突に終わってしまったというか、いや、いっそなかったことにしてください、という事態になっているのだが、いかんせん、常識の中で生きてきた私には、この非常識な存在たちはイレギュラーすぎる。待ってくれ。
とてもついていけない。
「男……？　嘘だろう……？」
あんな女の中の女が、男だって……？
いや、マオが面白がって私を騙しているに違いない。
しかし、待てよ？　そういえば、声が……。確かに、男だったかもしれない……。
「嘘じゃないですってば。辰巳さんを騙しても、なにも面白くないですし」

やはり、鋭いな。
仙人の弟子というのは伊達じゃないんだということをたまに思い出す。
歪んだ鐘の音の反響音がようやくおさまってきたところで、やっと本題に入る。来月の決算によっては、この屋敷を売り払って、上海に戻るかもしれないことを説明した。
「それで、だ。君はこの『七色の龍玉』を持って、セイコさ……、いや、師匠のところに帰ったほうがいいだろう」
「……」
マオはしばらく無言で、二つの箱を開け、眺め、じっとなにかを考えているようだった。
そうして、ふっと見上げるような視線を寄越すと、「こんな重い箱、二つも持って帰れません」
当たり前のように言う。
大事な至宝を裸で持って帰るわけにもいかないだろうし、かといって、この小さな体では、いくら小箱とはいえ二つ重ねて持つのは大変だ。

「こっちは私が庭で拾ったもので、こっちは君の師匠が持ってきた玉だ。師匠は、君が落として、私が拾った玉はレプリカだと言っていたが、自分が持ってきた玉が本物だとは言わなかった。私には、正直言って、どちらが本物なのか分からない。どちらもレプリカなのかもしれない。本当は二つとも持って帰ってもらいたいところだが、一つしか持てないというなら、君がどちらか選んでくれ」

マオはまたしばらく二つの龍玉を見つめていたが、「つまり、わたしが落としたのはこっちなんですね？」

と、普通の木箱に入っている龍玉を指す。

「そうだ」

「なら、こっちを師匠に送り返せば、わたしの義理は通ります。で、辰巳さんは黒檀の箱のほうをそのまま持っていたらいいと思います。『預かっててください』と言ったのなら、また取りにくるはずですから」

「確かに、スジは通るが……」

送り返すって、郵便でか？（届くのか？）

仙界に住所地番があるとも思えない。

「それで、君はどうするんだ？」
「わたしはまだ探し物を続けようと思います」
「なんだって……？　しかし……？」
「わたしが探しているものはこの二つのどちらでもないんです」
「……？」
マオは、一級の黒茶を飲みながら、このとき、初めて自身の複雑な生い立ちを教えてくれた。
「生まれは西海の琥珀宮（こはくきゅう）というところです。父親は西海龍王の敖閏（ごうじゅん）。界隈では有名な女タラシで、奥さんも愛人もいっぱい居る人です。
わたしの母は宋という国の皇女だった人なんですが、当時、宋の王室が西の海域に自由に出入りしたいがために、娘の一人を差し出したということらしいです。まぁ、要は政略結婚ですね。母はもともと病弱だったようで、だからこそ、龍王への生贄にされたのでしょうけど、西海での暮らしにも馴染めず、わたしを産んですぐに病死しました。
わたしはそのまま琥珀宮で何不自由ない暮らしをしていたんですが、恋愛モラ

ルのゆるゆるな父親や、生まれてから八百年間、姿が変わらない自分のことと
か、色々、思春期ゆえに思い悩むこともあって、そのうち、自分の生きる場所は
ここではないんじゃないかって思うようになりましたね。それで、ざっくり言う
と、家出したんです。各地をさまよって、行き倒れ同然にたどり着いたのが、師
匠のところだったわけです」
「……」
思わず三分ほど言葉を失ってしまったが、ということは、マオって、ものすご
く由緒正しいお姫様ってことにならないか？
よく高貴な血はどんなみすぼらしい格好をしていても光る、とかいうが、例外
も居るんだなぁ、としげしげ思った。
しかし、八百年だって？
人生の先輩はマオのほうだったということか。
「以上、だいたいそんなところです」
「つまり？」なんだか馬鹿馬鹿しくなってきた。「ちっともそうは見えないが、
やんごとなき王家の姫君が、約束された何不自由ない生活にぼんやりと疑問を

持って出奔してみたが、たどり着いた先の洞府では大したものも見つけられず、どこかにあるかもしれない、生き甲斐とやらを探してます、ってことなのか？」
「なんか、辰巳さんが言うと、だいぶ悪意が上乗せされますね」
「……それで、君はいったいどうしたいんだ？」
「ええと、できれば、上海までついていきたいかなー、と」
「ハァ？　私と一緒に居たって、その生き甲斐だか、存在理由だかは知らないが、探し物が見つかるとは限らないだろう？」
「でも、結婚を繰り返し各地に愛人を作る父よりも、女装が趣味の変態仙人よりも、辰巳さんのほうがはるかにマトモですから」
　あんまり褒められた気はしないが、マオなりに立ててくれているのだろう。
「あの龍玉は、わたしの家出先を探し当てた父が、カメラがわりに師匠に預けたものなんです。龍玉というのは、お宝でもなんでもありません。あれは、龍王の目となり耳となるものです。それ以上の機能はないんですよ」
「なるほど……。つまり、言葉は悪いが、監視のための物だったのか」
「ちなみに」

マオが、二つの玉を取って、両の手のひらにそれぞれ乗せるようにした。
「この二つは、どちらもレプリカです。師匠がこの二つ目のレプリカを持ってきたのは、父にせっつかれて、本物を持ってきた振りをしただけだと思いますね」
「君の師匠は、君の味方なのか？」
「んー、どっちとも言えない、微妙な関係ですねー。師匠は父の古くからの知人でもあるそうなんですが、力関係として、やはり龍王には逆らえないようで、かといって、わたしが父の監視を疎ましく思っているのも知っていて、それをなんとかしたい、と思ってはいるみたいです」
「ウム……。難しいな。あのカエルは？　椒図（しょうず）と名乗ったが」
「あれも、父に言われて、わたしの様子を見にきただけですね」
「にしては、あっさり引き上げたが？」
「居場所さえ分かればこっちのもんだと思ってるんでしょう。またくると思いますよ。今度は亀か、虎か、パンダかもしれませんが」
「そういえば九兄弟だと言ってたな……」
そんなに色々居るのか。

上海の都会で、パンダは目立つだろうなぁ……、などと今から心配してしまった。
せめて、小さな亀なら飼ってやらないこともないんだが。
「まぁ、どっちにしても、来月の収支次第か……。上海に行ってみたいか？」
「別に、辰巳さんと一緒なら、どこでもいいですよ」
こんな質素で平凡な暮らしがいいというお姫様も珍しい。
ただ、私としては、マオの探し物に付き合うのも悪くはない、と思ったのだ。

【終わり】

私信：Mick さん、素敵な絵を描いてくれてありがとう～～～～～～～～～～～～！